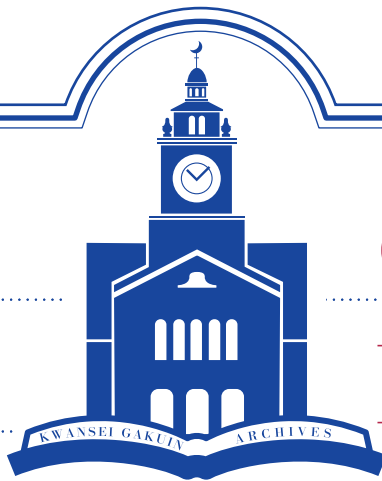


Kwansei
Archives



Gakuin
Newsletter

学院史編纂室便り

No.

58

特集：時計台

2024・秋学期

- | | | |
|---|------------------------|------------------------------|
| 1 | 打樋 啓史
関西学院宗教総主事 | 関西学院のキリスト教主義教育——欠けは多くても愛は豊かに |
| 2 | 井上 琢智
学院史編纂室主任研究員 | なぜ、学院史資料室から学院史編纂室となったか |
| 3 | 石樽 督和
関西学院大学建築学部准教授 | 関西学院のキャンパスを設計した「建築家」ヴォーリス |
| 4 | 谷口 真紀
関西学院大学建築学部准教授 | 関西学院のプラント |
| 5 | 阿部 潔
関西学院大学社会学部教授 | 「池内」での出会い |
| 6 | 学院史編纂室 | 活動報告 |

関西学院のキリスト教主義教育 ——欠けは多くても愛は豊かに

関西学院宗教総主事・関西学院大学社会学部教授 打樋 啓史



草創期の関西学院

1889（明治22）年9月にランパス宣教師らが兵庫県に提出した関西学院の設立願が、同月28日に県知事によって認可され、同年10月11日から正式に授業が開始されました。神戸・原田の森の校地で、教師5名、学生19名での出発。一万坪の広大な森に最初に建てられたのは、校舎（1階）と寄宿舍（2階）から成る木造2階建てと平屋建ての付属棟、この2棟だけでした。

いずれも大変簡素なものだったようで、後に関西学院で国語や漢文を教えることになる村上博輔が、当時学院を訪れた際、教室の様子をこう記しています。「風通しのよい、器具も粗末で不揃いな、とても狭い教室。腰かけが4脚しかないところもある。うどん屋の座敷に入ったような気がした」（『関西學報』第8号、1909、大意）。

また授業科目や内容についても、当時の生徒が、「とにかく英語が進んでいて、地理歴史は全部西洋人の教師から英語で学んだが、科学はとにかく不十分を免れなかった」（『関西學報』第9号、1910、大意）と回想しているように、一人の教師が専門でない他の何科目も教えていたので、色々と欠けが多かったことが分かります。

施設の面でも、授業の面でも、すべてが整っているのは程遠い環境のなかで、できることから始めていった。それが関西学院の始まりでした。それに関して、前出の村上博輔は印象的な記述を残しています。村上は、粗末な教室だったけれど、「自分はここの教育に大いに感動した」と言います。何に感動したかという、「教師生徒の親睦が目新しく自分の心を動かした」というのです。「教師は生徒をまるでわが子のように思っている」と。

村上は、当時の一般的な教師が、「役にも立たない理屈を並べて、生徒を驚かせたり、自分を飾って偉そうに見せたりしていたのに対して、ここにはまったくそれがなかった」と記します。さらに、「ただ生徒を育てることだけを考^{シンプル}えている。講義はとても簡単だが、ここに真の教育の味が見える」とし、「人間は枝葉を華美にして根本を忘れがちだが、ここにはそれがなく、根本を大切にしている。そこに自然と豊かな枝葉ができてくる」と続けます（『関西學報』第8号、大意）。

教師と生徒が仲睦まじく、教師は心から生徒のことを思い、人として大切に育てようとしていた。それゆえに、枝葉で飾らず、根本を重んじる教育に専念していた。私はこ

の頃の関西学院での授業の様子を想像すると、心が熱くなります。そこには大きな愛があったと思います。施設も授業も欠けは多かったけれども、愛は豊かだった。教師たちが生徒たちを思う愛は、溢れんばかりに豊かだった。そういう学校として関西学院は始まったのです。

キリスト教の本質としての「愛」

この「愛」はどこから来るものだったのでしょうか。関西学院が創立された際に作成された「関西学院憲法」第二款には、学院の目的として、「基督教ノ主義ニ拠リテ日本青年ニ知徳兼備ノ教育ヲ授クルニアリ」と記され、ここに「キリスト教主義に基づく全人教育」という学院の建学の精神が明示されました。「基督教ノ主義」と訳された元の英文は“the principles of Christianity”で、「キリスト教の本質」と訳すこともできます。

キリスト教の本質、それは「愛」にはかなりません。「神は愛です」（Iヨハネ4:16）と聖書が宣言する通りです。イエス・キリストは、その生と死のすべてによって、「神は愛」であることを伝えました。そして、人間がその愛に生かされ、互いに愛し合い、仕え合う道を開いたのでした。

関西学院の目的・存在理由であるキリスト教主義教育とは、この愛に基づいて若い人々を全人的に育てていくことであり、草創期の教師たちはそれを日々実践していたのです。朝夕の礼拝の中で、自分が神に愛されていることを実感し、その感謝と喜びを源として、生徒を愛し育てていく。この最も根本的な真実を、まさに「建学の精神」を、彼らは生きていたのでしょうか。

135年の時を経て、関西学院は8つのキャンパスに28,000人を超える園児・児童・生徒・学生が在籍する総合学園となりました。施設面でも、授業の面でも、創立時から大きな発展を遂げました。しかし、私たちは愛において豊かでしょうか。草創期の教師たちが、生徒をわが子のように思い、人として大切に育てようとした、その教育は今も生きていますでしょうか。自戒の念を込めて記すのですが、大きくなり、豊かになることで、私たちは根本を忘れてしまいがちです。

クリスマスを待ち望むこの季節、「愛に基づく全人教育」という学院の存在理由に心に向け、そこに立ち返ることができればと願います。

（うてび けいじ）

なぜ、学院史資料室から学院史編纂室となったか

学院史編纂室主任研究員（元経済学部教員） 井上 琢智

学院史資料室

(1978 室長：小林信雄、柚木学、畑道也、山本栄一)

関西学院の創立 90 周年直前の 1978 年、図書館第 3 書庫 4 階の貴重図書室に学院史資料室が設置された。その目的は「学院の公文書、記録、創立者および学院関係者の諸資料等を収集、整理、保管し運用すること」であった。

1984 年、旧日本人住宅（現・関西学院会館）（写真）に同事務室が移り、専用資料庫が隣地に完成した。新大学図書館の完成に伴い、1998 年 1 月、時計台 1 階に入居した。この間『関西学院史資料目録』8 分冊を刊行し、『資料室便り』(No.1, 1985 ~ No.10, 1999) を発行した。

続いて 1990 年 4 月から学院史資料室は百年史編纂事業委員会事務局を兼ね、その下部組織である関西学院百年史編集委員会は百年史執筆の調査・研究・討論の内容を掲載する『関西学院史紀要』（図録正誤表あり）を 1991 年 6 月に創刊し、第 5 号（1996）まで刊行した。1995 年の阪神・淡路大震災をはさみながらも 1998 年に『関西学院百年史』全 4 巻（資料編 2 巻・通史編 2 巻）を刊行した。

この『百年史』執筆期間中の 1997 年度に与えられた大学の海外研修制度を利用してメルボルンのモナッシュ大学に在籍していた井上は、その年の 8 月までメルボルンで原稿執筆に従事した。

学院史編纂室

法人時代（1999 初代室長：山本栄一）

大学時代（2014 初代室長：神田健次）

関西学院のもっとも象徴的な建物である時計台（2009 年に国の登録有形文化財に指定）への資料室移動を契機として、学院史編纂室の今後のあり方が議論された。その検討課題は次の二点であった。

第一は、学院史の資料を収集するだけでなく、次回の年史編纂（周年事業は 25 年毎とされた）の準備を続ける調査・研究を継続的に行うことをどのようにすれば担保できるかであり、第二に、学院史編纂室が時計台に位置することから、その担うべき役割をどうすべきかという課題であった。

この二点は、いずれも時計台に位置する学院史編纂室を過去と現在と将来を結ぶ『場』として変貌させることを示唆した。それを実現するために創立 125 周年記念事業の一つとして大学博物館が 2014 年に時計台内に設置され、そ

れまで院長のもとに置かれていた学院史編纂室は関西学院大学博物館の一部局となり、学院史の常設展示と特別展示とが博物館と学院史編纂室とのよき協力のもとに開催できるようになった。

学院史編纂室の役割の検討に際して課題となった学院所蔵美術品調査と情報の集中管理については、当時美術顧問であった永田雄次郎が「報告 関西学院所蔵の美術作品に関する調査報告」—日本画を中心として—（『紀要』第 8 号、2002）を報告した。しかし、絵画の所蔵場所の変更が学院史編纂室へ報告されないこともあり集中管理は今なお万全ではない。

また、1988 年度、教職員、卒業生の著作等を収集する「新月文庫」が学院史資料室に設置された。大学博物館設置後、博物館が「新月文庫」を管理することになっているものの、収集・受入・データ入力については、大学図書館が引き続き担っている。もっとも、博物館には収納・展示場所がないため、公開は凍結されたままである（2024 年 3 月末の登録図書は、9,335 冊である）。

山本栄一は、学院史編纂室への名称変更の意図を振り返り、こう記している。「将来の関西学院というものに方向付けを出来るような役割を果たしていくような活動としての歴史編纂や成果が出るよう……常に体制を整える」必要があり、その編纂の仕事は「急流を駆け上るといぐらいの力がないと出来ない」（『学院史編纂室 30 周年を迎えて—なぜ学院史編纂が必要なのか—』『紀要』第 15 号、2009。本号に詳細な「学院史編纂室 年譜」および『関学』学 開講テーマ リスト）が掲載されている。今なお、この山本の想いを追いかけている。

（いのうえ たくとし）



旧日本人住宅（『神学部アルバム』1930 年頃より）

関西学院のキャンパスを設計した 「建築家」ヴォーリズ

関西学院大学建築学部准教授・建築学部ヴォーリズ研究センター研究員

石樽 督和



日本各地でフィールドワークをしていると、関西学院の卒業生に出会うことがあって嬉しい。先日は沖縄で古写真を見ながら戦後にできた市場について話してくださっていた方が卒業生だとわかって、話題は那覇の戦後から1970年代の西宮北口へと時空間を飛んで展開した。

卒業生のみなさんと話していると「Mastery for Service」というスクールモットーだけでなく、しばしばキャンパスを設計した「ヴォーリズ」の名前が出ることに驚く。戦後の学制改革とマンモス化を経て多くの私立大学がキャンパスの性格を変えてきたにも関わらず、関西学院は上ヶ原移転時からのキャンパスの特徴が引き継がれ、卒業生にも広く浸透している。他の学校ではなかなかないことだろう。

関西学院のキャンパスを設計した「建築家」ウィリアム・メレル・ヴォーリズ（1880-1964）は20世紀はじめから1960年代まで、関西を中心に活躍した。私は、2022年に建築学部を設置されたヴォーリズ研究センターの研究員としてヴォーリズに関わる研究をはじめた。関西学院大学博物館で9月末からはじまっている展覧会「天を見あげて—関西学院のヴォーリズ建築—」では、戦中期に金属供出で撤去された時計台の手すりのアイアンワーク（金属製の装飾）を木製模型で復元し展示している（写真）。

大理石と人造石でつくられた時計台の手すりにポカンと空いた穴。復元模型制作の過程で、手すりに装飾があるかないかは、階段周りの性格を大きく変えることを実感した。建物とそれを使う人間の身体は大きさが異なるが、その間をつなぐのが建物に施された装飾だ。穴の空いたそっけない階段は、復元模型が入ることによって身近なものへと変化する。展覧会の会期中、みなさんにも模型設置前の手すりを思い出しながら、時計台の階段を登ってもらいたい。

ところで20世紀の日本でモダニストとして活躍した建築家たちは、乱暴に言えば独立した個人として作品を構想し建築をつくるロマン主義的な主体としてとらえられてきた。ヴォーリズが活躍した時代、日本国内でも徐々に装飾を廃した近代建築が登場し始めた時期であるが、ヴォーリズは装飾をもった様式建築をつくり続けた。ヴォーリズの設計した建物を見ていくと古典的な建築の規範を形にすることが主題というより、必要とされる建物のために過去の様式を適用することでクライアントの要望を形にし、安定した魅力的な環境をつくることに力を注いでいた。

今年の夏、関西学院同窓会滋賀県支部のみなさんが近江八幡のヴォーリズ学園を会場に企画されたイベントで「ヴォーリズ建築」について講演をする機会を得た。よく知られている通り、ヴォーリズは建築設計以外にも多くの社会的な活動・事業を行っていた。その拠点が近江八幡であった。講演会に参加いただいたみなさんと話すうちに、私はヴォーリズを「建築家」と呼ぶのは適切ではないかもしれない、と思うようになった。先に述べたようなロマン主義的な主体としての「建築家」という言葉では、ヴォーリズの仕事を矮小化してしまう。21世紀の日本に生きる私たちは建築家の職能や、建築の定義が急激に変わってきたことを知っている。建物を作品としてつくることだけが建築家の仕事ではなくなった。広く社会と関係性を持ち、建築設計以外でも世界をつくっていく職能へと建築家は変わってきた。ヴォーリズの仕事はモダニスト的な「建築家」ではなく、現代的な建築家像に重なる。今こそ、ヴォーリズの仕事を再読していきたい。

今回の展覧会「天を見あげて—関西学院のヴォーリズ建築—」のために倉田麻里絵学芸員を中心に行われた調査では、関西学院に建てられたヴォーリズ建築の総体を記録した資料がないことがわかった。また戦中期の金属供出で失われたままになっているアイアンワークがキャンパスにはいくつもある。関西学院とヴォーリズをテーマとする研究と復元の可能性は、まだまだ広がっている。

（いしぐれ まさかず）



アイアンワークの復元模型のある時計台の手すり

関西学院のプラント

関西学院大学建築学部准教授・建築学部ヴォーリズ研究センター研究員

谷口 真紀

偶然にも、関西学院大学図書館で借りた *The Omi Brotherhood in Nippon* が著者直筆のサイン本だった。同書は、1934年にミッシヨナリー・アーキテクト（キリスト教伝道者で建築家）のウィリアム・メレル・ヴォーリズが関西学院第4代院長のコーネリアス・ジョン・ライトホール・ベーツに贈った署名本であった。1929年竣工の学院の西宮キャンパスの設計者と施主の間柄を越えて、その後もふたりが親交を重ねたことがうかがえる。

ヴォーリズが手がけたキャンパス・デザインの要は、やはり時計台の建物だろう。当初は図書館だった。正門から中央芝生、図書館、甲山へと軸線が通る。「山べにむかいてわれ目をあぐ」の讚美歌 301 番が思い起こされる。また、軸線を挟んで左右に学問棟が並び、双方を結ぶように図書館が配置されている。専門と教養を統合して実践に資せよと、校訓「Mastery for Service」を提唱したベーツの声が喚起される。

キャンパスのレイアウトをめぐるにはこんなふう語られてきた。しかし、上記はあくまで建物の鑑賞者側の解釈だという点を再確認しておきたい。ヴォーリズは西宮のキャンパス設計に関してまとまった文章を残していないから、そうした解釈が彼の意図通りだという確証は得られない。ただ、それは、設計者のコンセプトを使い手が解釈できる余地を彼があえて残したのだと言い換えられる。彼は自らの背後にある大いなるものをわきまえ、建築に取り組んでいた。学生・職員・教員の成長の器となる教育施設を建てるという務めをいったん果たしたら、あれこれ口出しせず、使い手に、最終的には神に、建物を託したのだろう。

1905年に来日したヴォーリズは、高等学校で英語の先生として社会人のスタートを切った。以来、教育についてのビジョンを養う。学びをいつときではなく生涯にわたる営みと見なし、学んだことを発揮して世の中に奉仕した副産物が学びの成果なのだとい頃から考えていた。

そうした展望にもとづいて設計したキャンパス完工にあたり、「関西学院の施設 (plant)」は「未来を見据えたキャンパス・レイアウト」になっていると、英語で一言だけ寄せた (1929年5月20日付『関西学院新聞』)。

ヴォーリズの意味は、先ほどとは逆向きに軸線をたどると、さらに際立つかもしれない。ちょうど手元に、そうしたアプローチで撮影された写真がある (写真)。1939年の学院50周年記念誌の最後のページに掲載された写真は、両脇に学問棟が控える図書館から中央芝生、正門、西宮の町を臨むものだ。そのように視線をやるとどうだろう。キャンパスに向かうだけでなく、キャンパスから世界を見やってみて、やるべきことに着手せよと、スクール・モットーが鮮明に浮かび上がってくるようだ。信仰をともしにするベーツとヴォーリズのキリスト教に根ざす教育理念が共鳴しているように感じられる。この方向からキャンパス・レイアウトが解釈されることはあまりなかったと思に至る。

学院に集うひとりひとは、時計台がシンボルの図書館から世界に向かって伸びゆく草花 (plant) でもあると、ヴォーリズは図面にヒントを忍ばせた。私たちは彼と対話を重ね、建物の価値を自ら発見していくよう委ねられている。実に、それ自体も教育だ。学院の記憶を継承する図書館で引き当てた献本をめくりながら、そんなことを考えた。

(たにぐち まき)



時計台 (旧図書館) より正門を望む

i 主要な解釈については以下を参照のこと。田淵結「関西学院とヴォーリズ」『関西学院史紀要』第23号、2017年、19-20頁。田淵結 (監修)『ヴォーリズのかたち』展:改訂版 関西学院大学、2004年、25頁。関西学院百年史編纂事業委員会『関西学院百年史:通史編I』学校法人関西学院、1997年、448-450頁。
ii William, Merrell, Vories. "Let No Man Despise Thy Youth." *Colorado College Publication*. General Series 177 (Studies Series 9) (1931). 13. コロラド・カレッジ・スペシャル・コレクション所蔵 [Colorado College Information File (CCIF) Alumni - Bio - Vories, W. Merrell 1904 (Hitotsuyanagi)].
iii 同前、15頁。

essay

「池内」での出会い

関西学院大学社会学部教授 阿部 潔

池内記念館には、かれこれ四半世紀近くいたことになる。そこで過ごした長い年月をふりかえるとき走馬灯のように思い浮かぶのは、不甲斐なく日々を過ごしていた自分自身の来し方でも、色々とお世話になった方々への感謝でもなく、不思議なことに折々の機会に目にした生き物たちとの出会いである。

春の使者

上ヶ原キャンパスの桜の美しさは、つとに名高い。だが、その一ヶ月ほど前、池内記念館前の日本庭園では嬉しい光景が毎年楽しめた。冬眠から目覚めた亀が動き始めるのだ。甲羅にこびりついた白濁色の泥は、長かった冬を感じさせる。気持ちよさそうに半目で甲羅干しする姿を眺めていると、桜より一足先に春の訪れを感じられた。このカメの種類は、おそらくミシシippアカミミガメ。しばらく前まで公園や神社境内でよく目にした。もともとは祭りの夜店などで売られていた小さなミドリガメ。だが、今ではどこの池でもほとんど見かけない。「特定外来生物」に指定されたからだ。幸い日本庭園でも新月池でも、元気な姿に今でも出会える。

親子カモの旅立ち

大型連休も明け、夏の訪れを感じさせる季節を迎えたある日のこと。一階の研究室の窓に何かがつぶかる音がした。驚いて目をやると、大きなカモがこちらを睨みつけるように地面に佇んでいた。その横で子ガモが列をなしている。口の字型をした池内記念館の中庭には、小さな池がある。だが建物に囲まれているので、上(空)から入れても横(地上)からは出られない。母ガモは、無事に孵って元気に育ち始めた子ガモを連れてあたりを徘徊したものの、出口が見つからず業を煮やして「開けてくれ!!」とばかりガラス窓に体当たりを試みたのだろう。必死の訴えを受けて、仕事もそこそこに放り出し、管理人さんと相談して中庭と廊下をさえぎるガラス戸を開けて外に出られるようにした。最初は戸惑っていた親子カモも、やがて列をなして仲良く旅立っていった。このささやかな人間によるアシスト業務は、管理人さんとの密かな年中行事と化し、建物が解体される今年度の夏まで続いた。カモ一家の旅立ちは、いつも容易ではなかった。カラスやイタチに襲われるので、10羽ほど生まれる子ガモのうち無事生き残るものはごくわず

かだ。愛くるしいだけでなく自然の厳しさも教えてくれた親子カモの旅立ちに十年以上にわたり立ち会えたのは、本当に幸運だったと思う。

蛇の安息日

コロナ禍の影響のもとで、キャンパスの風景は激変した。なにより人がいなくなったのだから。学生たちの熱気に満ちていたキャンパスは、まるで廃墟のように静まり返った。それを目の当たりにして、未曾有の危機の深刻さを人びとは痛感したことだろう。ただ、人混みも熱気も苦手なわたしは、その静けさを密かに味わう毎日を送っていた。そんなある日、日本庭園で昼食をしていると立派なアオダイショウと遭遇した。あまり知られていないが、キャンパスには昔から蛇が棲みついている。日頃は草陰や石垣の隙間に身を潜めているので、姿を見ることは稀だろう。コロナ禍で人間がステイホームを決め込む中、キャンパスの生き物たちにとって、棲息環境はにわかに望ましいものになったに違いない。なにせ一番の厄介者が姿を消したのだから。偶然訪れた安息の日々を満喫するかのよう、蛇はベンチに座るわたしの横を滑るように通り過ぎると悠然と草むらへと姿を消した。

自然との出会いに満ちた思い出深い池内記念館は、もうそこにはない。古い建物が壊され新たな施設が建つのは、手狭なキャンパスでは避け難いことだ。だが、その土地に刻まれた数々の出来事の歴史は、たとえモノが消えたとしても、どこかで／だれかが／なにかのかたちで引き継がねばならない。『学院史編纂室便り』とは、そうした使命を担う貴重な媒体ではないだろうか。今回幸運にも寄稿の機会を与えていただき、そんなことをふと考えた。

(あべ きよし)



活動報告

共同研究員の刊行物

図録『寿岳文章 人と仕事展』増刷出来る

2021年向日市文化資料館で開催された特別展「寿岳文章 人と仕事展」の図録はしばらく品切れになっていましたが、増刷が出来ました。英文学者であり、和紙研究で知られる寿岳文章（1900-1992）を取り上げ、展示資料および本人の軌跡をまとめた図録です。

以前と同様、向日市文化資料館で頒布が再開されています。この機会にぜひご利用ください。

頒布場所 向日市文化資料館

〒617-0002

京都府向日市寺戸町南垣内 40-1

電話番号 075-931-1182

頒布価格 1冊 1,000円

郵送をご希望される方は、現金書留にて代金に送料310円をあわせて、お名前・ご住所・電話番号と寿岳展図録頒布希望の旨を書き添えてお送りください。2冊以上の場合は送料がかかりますので、事前に同館へお問い合わせください。



おもなイベント

2024.09.10 「第57回関西学院史研究会」開催

演題：関西学院神学部の朝鮮人学生一留学の背景と意義—

講師：松谷基和氏（東北学院大学国際学部教授）

2024.10.24 「第58回関西学院史研究会」開催

演題：ミッション・スクールの建築史

講師：川島智生氏（神戸情報大学院大学客員教授、建築史家）

関西学院史研究会の記録は『関西学院史紀要』第31号に掲載予定です。



資料紹介

第2教授研究館から銅箱発見！

2024年5月20日、第2教授研究館（池内記念館）の説明銘板を撤去した際、「柱の中に銅製の箱が埋め込まれているのが見つかった」と、本学・施設統括部から連絡が入った（写真1）。さらに6月15日に定礎石（1986）を取り外した際、もう一つ、銅製の箱が見つかった（写真2）。

この第2教授研究館は経商両学部を中心とする教授研究館で、1958年に北側（日本庭園側）、1974年に南側東（池内記念館）、1986年に南側西が3期に分けて完成した。

2024年に第2教授研究館は解体され、その跡地には新学生サービスセンターが建設される計画である。

二つの銅箱には、1974年、1986年当時の大学・大学院要覧、名簿、新聞、硬貨などが収納されている（写真3、4）。これらの収納物からは、関西学院の教育を支えた第2教授研究館（池内記念館）の歴史が伺われる。



写真1 柱の中の銅箱



写真2 銅箱と定礎石



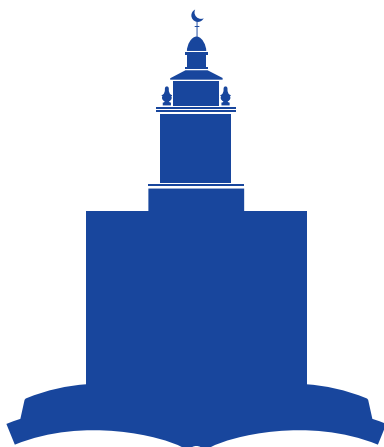
写真3 収納物 1974



写真4 収納物 1986

編集後記

- 『学院史編纂室便り』第58号では、関西学院大学博物館の展覧会「天を見あげて—関西学院のヴォーリズ建築—」（12月14日まで）にあわせて、「特集：時計台」を掲げました。アイアンワーク復元プロジェクトは続きますので、ご注目ください。
- 『学院史編纂室便り』バックナンバーは、学院史編纂室ホームページで公開しています。さらに第57号からは、関西学院大学リポジトリに登録しています。こちらもご利用ください。



『学院史編纂室便り』第 58 号

2024.12.15 (ISSN 2436-1518)

関西学院大学 学院史編纂室

〒662-8501 西宮市上ヶ原一番町 1-155

TEL: 0798-54-6022 FAX: 0798-54-6462

<https://ef.kwansei.ac.jp/archives> (日本語)

<https://global.kwansei.ac.jp/archives> (英語)

